

3月30日(木)石川県平和運動センターの派遣で県教組の方と2名で那覇に到着する。金沢から羽田経由6時間、20℃の初夏の沖縄。日差しが眩しく感じられ、明日からの辺野古への期待と不安が膨らむ。夜、国際通りにある「ライブハウス島唄」で地元「四代目ネーネーズ」を聴く。ライブの合間「あなたはカメジローを知っていますか」という瀬長亀次郎氏のドキュメントが流れる。ネーネーズの歌詞には平和を願うものが多く、強烈なメッセージを感じる。

3月31日(金)レンタカーで那覇から1時間半、高速を北上し名護市辺野古へ。午前10時頃、東海岸の高台にある米軍基地キャンプ・シュワブのメインゲート前に到着。そこで歩道沿いのテント、新基地建設反対ののぼり、立て看板を目にする。工事車両進入を阻止する「座り込み999日」の看板も。



現地スタッフに挨拶するとすぐ、ゴボウ抜き(機動隊に無理矢理移動させられること)についての説明を受ける。金曜は座り込みの少ない日らしく、私達を含めて座り込みは30人程度だった。皆、私達が着いたことを歓迎して下さる。座り込みという緊張する場面においても、マイクを片手に仲間同士で状況報告、意見発表し、気持ちを鼓舞している。現地では沖縄タイムスと琉球新報の記者がずっと座っていた。琉球新報の記者曰く、「ゲート前は段々要塞化している」とのこと。

確かに入口前のフェンス、波状の鉄板、扉などは重々しく、段々道路に押し寄せている。日に3度、ほぼ定刻に工事車両搬入の合図がある。すると、お決まりの機動隊隊長が「排除!」とメガホンで叫び、若い機動隊委員たちが私達の前で「動いて下さい」「怪我しますよ」などと声をかけてくる。一切感情はなし。私達は仲間同士腕と腕を組んで離れまいとするが、2人の起動隊員が1人の座り込みに対して左右に入り、腕を持ち上げる。私は足まで持ち上げられるのがどうしても嫌で「立って下さい」「自分で歩いて」と言われ、そのまま移動。すると、機動隊車と隊員で囲まれた一角に入れられる。その間、工事車両が出入りし、生コンクリート車、土砂積載車などが通る。毎日何台出入りしているかはスタッフが数えていた。機動隊員に対して座り込みをしていた仲間は「なぜここに閉じ込めるのか理由を言え」「こんなことをして恥ずかしくないのか」と必死で訴えるが、相手は私達と目を合わそうとせず、一切反応しない。そのように上からの指導があるのだろう。午後3時にも同様のゴボウ抜き。私はどうしても嫌で側から仲間のビデオ記録をしていた。記録しながらも移動させられ、「触らないで下さい。女性を呼んで」というのが精一杯だった。若い機動隊員はどう見ても沖縄の男の子の顔立ち。こうして沖縄県人同士、日本人同士でいがみ合わねばならないのが理不尽でならない。



座り込みの合間に休憩やトイレの時間もあり、スタッフが交代で近くの公共施設やコンビニへ車を出してくれる。乗り合わせた地元の方との世間話にほっと心が落ち着く。皆、手弁当で座り込みを頑張っていると実感。15時の最後の工事車両出入りが終わると、その日は解散となる。私達はその後、昨年12月14日にオスプレイが墜落した海岸へ行く。辺野古から車で20分の安部（あぶ）集落の海岸は遠浅で砂地。砂地の先に崖に沿った岩場がありそこに墜落したそう。たまたま

蛸船漁師の方に落ちた場所などの説明を受けた。



墜落の日の夜、午後9時から12時まで米軍のコブラヘリコプター2機が上空20mをライトで照らしながら旋回し、集落は騒然となったとのこと。翌日の米軍基地は半旗が翻っていたらしく、死亡した隊員がいると見られるが発表はない。現地海岸には後日、稲嶺名護市長も訪れたが、米軍に阻まれ近くには行けなかった。また、別のオスプレイはその前日にも普天間に不時着している。非常に危ない機体であると思えない。その夜はゲート前のテントには男性しか宿泊しないということで、私は仲間の紹介で瀬嵩地区の宿へ。



4月1日（土）座り込み1000日目。雨の中、600人が集まる。不当に逮捕され保釈された沖縄県平和運動センターの山城博治さんが弁護士と共に登場すると、場は大きな拍手に包まれる。

山城さんが一人一人と握手を交わす中、私が「石川県から来ました」と伝えると「内灘闘争だね」と笑顔で返して下さる。山城さんは収監されていた時も外からの仲間の声に励まされ、差し入れの本は天井ま



で積み上がったと言っていた。152日の拘留はあまりにも不当で長い。

当日のゲート前の座り込みの人数は昨日と比べものにならず、人の数の力を感じる。しかし、新聞によると座りこみが20人程度になった午後3時半に工事車両が入ったとのこと。無力感しかない。

その後、辺野古の漁協近くの第一テントを見に行く。スタッフ数名が常駐し、これまでの闘争の経緯、情報を来訪者に伝えていた。こうしてずっとテントを張って粘り強く非暴力で闘うという姿勢に頭が下がる思いだった。

近くにはボートのキャンプもあり、カヌーやダイビングスーツが多く積まれていた。時刻は夕方近くになっていたが、現地の仲間と共に高江のヘリパット（オスプレイ離発着場）を見に行くことにした。高江は辺野古から北へ車で1時間強、原生林の緑が濃く、標高も高く、とても美しい自然が残された地域。到着したところから1km先に既にヘリパットは建設されているが、入り口には山を削って作ったフェンス、ゲート、何十人もの警備員の姿があった。工事のメインゲート前のテントでは地元の方が1名ストーブを焚いて座っていた。私達にやんばるの森、工事の経緯について説明して下さる。ここでもずっとテントを貼り続け、反対の意思を表明し続ける人達の姿があった。



4月2日（日）9時から那覇市若狭の対馬丸記念館へ。1944年8月22日対馬丸に乗った約1500名の学童集団疎開の子どもたちが魚雷攻撃により死亡するという惨事があったことを記録に残す施設。その後、那覇市内の書店の「沖縄コーナー」へ。教室1室程度の広いスペースに沖縄にまつわる様々な書籍が集められていた。沖縄という土地に生きる人々のアイデンティティの強さを感じずにはられない。

金沢へ戻り、職場会での報告のみならず、多くの人々の辺野古について関心を持ってもらいたいと考えるようになった。私が伝えることで相手に心のどこかに残ってほしいと願う。これが自分達の目の前の出来事であったらと想像し、沖縄の問題ではなく日本の問題であると考えねばならないと

思う。沖縄がこのような国家権力の暴挙に対して闘い続けるのは限界があり沖縄に対する構造的差別に等しい。しかし、理不尽なことにも向き合い続け、権力に不服従の意思を表明し続けることは私たちができることの一つであると思う。